

意見 視点

65歳以上の高齢者が3000万人を突破し、4人が1人が高齢者の時代になった。2040年には36%まで増加すると予測されている。1人の女性が生涯に産む子供の数も1997年以降、1・4以下が続いており、好むと好まざるに関わらず、高齢者が生産を担う主力とならざるを得なくなっていることを認めなければならぬ。

この超高齢社会を、被扶養者の増加という視点ではなく、生産年齢人口の増加という視点で考えることが必要になる。これからの歯

北村 憲司 福岡歯科大学長



九州大歯学部卒。九州大医学部助手、講師を経て、1994年に福岡歯科大教授、2009年から同大学長。筋肉組織の一種、平滑筋のなかでも、特に血管平滑筋の薬理学が専門で、高血圧治療薬の作用メカニズムなどを研究。日本高等教育評価機構評議員、日本私立歯科大学協会理事。大阪府出身。

医学・歯学教育統合を

科医療も、そのなかで考えていきたい。

口腔や歯は、食物を咀嚼し、栄養の消化吸収を助ける器官である。これまで歯科医師はむし歯や歯周病などの歯と周囲の疾患の治療を行い、咀嚼などの機能改善を図ってきた。

また、口腔にはコミュニケーションを支えるという重要な機能がある。高度に発達、複雑になった社会では、多くの人と共同で、課題を解決することが日常的

に必要になる。コミュニケーションを取らない生活は考えられない。高齢者が元気な毎日を送るためには、

単に咀嚼機能の回復という観点だけではなく、社会機能に着目した歯科医療が求められている。

また、口腔にはコミュニケーションを支えるという重要な機能がある。高度に発達、複雑になった社会では、多くの人と共同で、課題を解決することが日常的

に必要になる。コミュニケーションを取らない生活は考えられない。高齢者が元気な毎日を送るためには、

単に咀嚼機能の回復という観点だけではなく、社会機能に着目した歯科医療が求められている。

また、口腔にはコミュニケーションを支えるという重要な機能がある。高度に発達、複雑になった社会では、多くの人と共同で、課題を解決することが日常的

に必要になる。コミュニケーションを取らない生活は考えられない。高齢者が元気な毎日を送るためには、

単に咀嚼機能の回復という観点だけではなく、社会機能に着目した歯科医療が求められている。

また、口腔にはコミュニケーションを支えるという重要な機能がある。高度に発達、複雑になった社会では、多くの人と共同で、課題を解決することが日常的

に必要になる。コミュニケーションを取らない生活は考えられない。高齢者が元気な毎日を送るためには、

単に咀嚼機能の回復という観点だけではなく、社会機能に着目した歯科医療が求められている。

また、口腔にはコミュニケーションを支えるという重要な機能がある。高度に発達、複雑になった社会では、多くの人と共同で、課題を解決することが日常的

をカバーできる知識と能力が求められるが、医師と歯科医師間の連携は、協業というより、初期の分業に近い状態で行われていると言わざるを得ない。

大きな要因は、互いの教育にある。現在の医学教育では、口腔に割かれる時間はほとんどない。対して、歯学教育では一般医学に比べて、口腔に関する領域を理解する知識の共有が行えないのが、チーム医療を難しくしていると言えらるだろう。口腔に興味が無い医師と、口腔に興味が無い歯科医師の連携では、残念ながら分業の段階にとどまるのもやむを得ない。

全身の健康と口腔の健康は密接に関連している。患者の生活の質を向上させるためには、医師と歯科医師は相互に理解することが大切だ。

口腔疾患について十分な教育を受けた医師と、全身を十分理解し、口腔を専門とする歯科医師の養成が急務だろう。

「疾病治療から健康保持へ」。医療の分野でも劇的な変換が起きているなかで、医師と歯科医師の養成は、従来のような互いに独立した教育ではなし得ないことは明らかだ。医学教育と歯学教育を統合、一元的な教育の下に、口腔の専門医を養成することが今こそ求められている。